哲学の探求　第38号　哲学若手研究者フォーラム　2011年5月　(129-145)

意味志向の充実化とは何か

葛谷 潤

はじめに

本稿の目的は、『論理学研究』(1900/01, 以下『論研』) におけるフッサールの意味概念を、充実化条件として、より具体的には方法・手続きとして解釈することを通じて、意味志向の充実化という彼の認識概念がいかなるものであるかを明確にすることである。

『論研』におけるフッサールにとって、認識とは意味志向の充実化であるとされる。この意味志向とは基本的に表現理解の作用、つまり表現の意味を把握する作用である。そして充実化とは、典型的には何らかの対象の知覚作用によってなされるものであり、意味志向と対応する直観の合致であるとも表現される。したがって、意味志向の充実化としての認識とは、表現理解において把握された命題内容や名辞の意味が、知覚作用によって顕示、正当化されるという認識実践を記述したものとしてひとまず理解できるだろう[1]。さて、「合致」と言われることからも明らかなように、充実化のための意味志向と直観の組み合わせは任意ではない。したがって、この両作用が合致するための条件とはいかなるものなのかが問題となるだろう。フッサールによれば、意味志向と直観はどちらも、彼が質料や意味、統握意味と呼ぶような理念的存在者（以下「意味」として統一）を例化している。そして、意味志向を直観が充実化しうるのは、意味志向と直観が同一の質料を例化しているとき、かつそのときに限る、とされる。しかし、この定式化が充実化の十分な説明になっているのは、意味志向と直観が同一の質料を例化しているとはいかなることかについて明晰な把握が提供された場合のみである。しかし、この点における踏み込んだ解明は、近年になってようやくいくつかの試みがなされるようになってきたという段階である。

以上の背景を受け、本稿は、意味志向と直観とが同一の質料を例化している

という事態のより明確な把握を提示し、フッサールの認識概念をより明瞭なものにすることを目指す。予め本稿の構成を示しておけば、以下のようになる。まず第一節においては、フッサール自身の意味概念の定式化と数学的言明におけるフッサールの記述を手引きとしつつ、質料概念を充実化条件として、より一般的には対象へと到る方法ないし手続きとして解釈するという見解を提示する。続く第二節においては、以上の解釈が数学的言明に限られるものではないということを、『論研』第五研究（以下「第五研究」と略記。『論研』第一研究から第六研究に関しても同様）における経験的言明に関するフッサールの記述を実際に解釈することで示す。第三節においては、上記の解釈の問題点となりえそうな点を検討することを通じて、この数学的言明と経験的言明の共通点と相違点をさらに明確化し、（一定の補完を受けた）フッサールの議論が両種類の言明に対して統一的な見解として提示可能であることを示す。最後、第四節においては、上記の議論を通して浮き彫りになるもう一つの充実化概念に関する問題を示唆することとしたい。

1 充実化条件としての意味と数名辞

さて、本稿の課題である「意味志向と直観が同一の意味を例化している」ということの内実の明確化のために、まずは意味という概念をフッサール自身がどのように規定しているかから見ることとしよう。フッサールによれば、意味は表現の対象について考える一定の仕方だといわれる[2]。本稿の解釈は、この「仕方」という表現を字義通りに受け取るものである。すなわち、意味とは対象へと向かうための方法・手続きである、と解する[3]。この解釈の強みは、充実化の際に意味志向と直観とがどのような意味で同じ側面を共有しているかが容易に理解されうるということである。まず、意味志向において表現の意味が把握されるとは、その表現の対象へと向かうための手続きが把握されているということとして理解されうる[4]。そして充実化とは、それらの手続きを実際に実行する作用によりその対象が特定されることとして理解される。すなわち、意味志向と直観が同一の意味を例化するとは、意味志向も直観も同一の方法・手続きの下で種別化されえ、両者の違いはそれを把握しただけの状況とそれを実際に実

行し対象を特定した場合の差異として記述されることとなるのである。

もちろん、方法・手続きといった表現はそれ自身いまだ曖昧であるし、それをフッサールの見解として帰属できるかも全く明らかではない。したがって本稿の以下の部分では、上記の解釈が実際にフッサールの見解として認められることを示しつつ、方法・手続きといった概念の具体的な内実をフッサールの論述に即しつつ明らかにしていくこととする。

まず、本節で参照するのは第六研究第一篇第三章「認識の諸段階の現象学」における記述である。ここでは数名辞に関する充実化を範例として、フッサールの充実化概念が簡潔に述べられている。この箇所をまずもって参照するのは、この箇所において彼の意味志向の充実化に関する簡潔な記述が見られるということに加え、本稿の採る解釈をフッサール自身が明確に表明しているように思われる箇所だからである。

さて、フッサールが数名辞に関してどのような理解をしていたかを見ることからはじめよう。まず自然数を直接名指す名辞として、1 に後続者関数+1 を有限回適用した系列(1, 1+1, 1+1+1,...)を考えよう[5]。そしてこの系列を順に 2=1+1, 3=2+1,... と十進法のアラビア数字で定義する。そしてこれらの上に加法や乗法、累乗を順に定義する。これによって「5・8」や「2^3」といった名辞が導入されることになる。ここで、自然数を直接名指す名辞の上に定義によって導入された数名辞をフッサールは「間接的表象 mittelbare Vorstellungen」と呼ぶ[6]。したがって本稿では便宜のために、残った数詞を「直接的表象」と呼ぶこととする。さて、以上の諸表象は、どれもその対象として何らかの自然数そのものを持っているということは明らかだろう。しかし、それらがその対象を指す仕方は、直接的表象と間接的表象では異なる。これがどのようなことかを、いかなる意味で間接的表象が間接的であるかを示すことで明らかにすることとしよう。まず、上のように導入された間接的表象はどれもその構成の段階を持ち、逆にその構成を定義に従って（例えば 3^2 ならば 3^2=3・3=3＋3＋3=...と）段階的に遡っていくことで直接的表象へと引き戻すことができる。この際、この引き戻す操作を「簡約（する）」と呼び、特に一段階だけ簡約を行うことを「一回簡約する」ということにする。この言い方を用いると、彼によれば、間接的表象は「一回簡約した場合に生じる表象の対象として特徴付けられる数」(vgl. XIX/2,604)

として対象を指示するとされる。例えば「3^2」という間接的表象の場合であれば、その対象は「3・3」の対象ということになる。しかし「3・3」もまた間接的表象なので、結局その対象はそれをもう一回簡約した場合に生じる表象「3＋3＋3」の対象ということになる。これは簡約の結果生じる対象が直接的表象になるまで続けられ、何らかの直接的表象になった時点で、初めて「3^2」の対象が、その直接的表象（「1+1+1+1+1+1+1+1+1」）が直接命名しているところの数、すなわち数9であったということが判明する。このような簡約のステップは、計算の結果生じる表象が間接的表象である限り続けられるが、どの間接的表象から始めても有限回のステップで終了する[7]。さて、この各段階は、その前の段階で示唆されるところの表象ないし対象の直観を含んでいるだろう。ここで、フッサールが数名辞の充実化と呼んだのは、その表象からその対象へと到るまでに、それら表象ないし対象を直観しつつ実行される手続きの各々のことである。これは上の簡約の過程を含むが、加えて直接的表象において対象を直接に名指す場面も含むことに注意しよう。そして、フッサールは簡約としての充実化を非本来的充実化と呼び、直接的表象における充実化を本来的充実化と呼ぶ[8]。

さて、簡約は間接的表象の充実化だけでなく、数学的言明の真偽の検証（つまり充実化）にも、本質的なものである。例えば、「3^2=2・4＋1」という言明を見たとき、この真偽を確かめるとき我々が行うことは、省略なしに述べれば上の簡約に相当するだろう。つまり、この言明はそのままでは真偽が判定できないので、我々は左辺を計算し、右辺を計算し、両者が9であることを見てこの言明が真だと判断するだろう。つまり、両辺が直接的表象であることは同一性言明の真偽の判定に関して必要条件である。そして主語述語文の場合であっても、それが何らかの特定の対象に関する言明である限り、簡約は必要である。以上のように、フッサールの分析は我々が数学的言明の検証における実践を反映したものとなっている。

さて、このような充実化に関するフッサールの記述は、彼の意味概念を充実化条件、より具体的には手続きとして解釈することを促す。というのも、フッサールによれば間接的表象を簡約するためには、その表象の「意味へと〔…〕立ち返らなければならない」と述べているからである[9]。これはつまり、意味の

把握が手続きの実行の必要条件だと述べているということだが、この意味が手続きでないとするならば、何であるのだろうか。このことは、逆に言えば、我々が与えられた数学的言明ないし数名辞に際して、それを充実化するために実際に我々が何を行わなければならないか（どんな手続きを踏まねばならないか）という観点から、彼の意味概念は分析されているということでもある。

さて、もう一度話を名辞の充実化に戻すことにしよう。先ほどの議論から、フッサールが充実化について、大まかに次の三点としてまとめられるような事象を見て取っていたといえるだろう。まず、名辞の持つ対象への間接性が、その名辞が段階的な構成を持つことによって生じるということ。そして、その構成の歴史は意味に織り込まれているということ。最後に、そのような間接性を持った名辞の充実化とは、その意味に立ち返りその構成へと遡ることによって直接的表象へと到り、対象を直観するという過程である、ということである。そして織り込まれた意味をたどることができるようになること、それが意味を把握することであり、表現の指示対象の特定（充実化）のための方法・手続きを把握していることなのである。

しかし、以上の解釈に対して、次のような疑問が提示されるかもしれない。まず、以上の分析は「意味」一般に当てはまるものなのだろうか。これは数学的言明という特殊な種類の言明にのみ当てはまるようなものではないのだろうか。さらに、もしそうだとしたとしても、経験的言明にも拡張されたそれをフッサールのテーゼとして帰することは妥当なのだろうか。

このような疑問に対しては、フッサールが経験的言明においても同様の分析をしていること、またそれが説得的なものであることを示すことで答えることができるであろう。したがって次節においては、第五研究におけるフッサールによる経験的言明の分析の検討へと移ることとしよう。

11 経験的言明における意味

この節では、以上で見て取られたような名辞に関する洞察に類似の洞察が、彼によって第五研究において経験的言明に関してもなされているということを確認したい。このことは、第五研究、とりわけ第四章、第五章の議論に見出さ

れる。まずは彼の記述をしばし追ってみることにしよう。

彼はこの箇所で付加語的名辞 attributive Namen に関する分析を行っている。この付加語的名辞とは、形容詞を名詞につけることで形成されるような名辞のことであり、一般に確定記述と呼ばれるものを含む。彼自身の例を挙げれば「ドイツ皇帝 der deutsche Kaiser」（XIX/1, 487）のほかに、確定記述ではなく固有名詞を元に形成された「ザーレ河畔の街ハレ die Saalestadt Halle」（XIX/1, 487B）なども含む。

まずフッサールは、このような名辞を、段階的に構成されたものとして考えている。彼は「全ての付加語的名辞をも含めて、名辞の大部分が、直接または間接に判断に由来している entspringen ことは、疑う余地がない」（XIX/1, 486）と述べる。これは、「この木は緑である」というような判断と「この緑の木」というような名辞の間の関係のことを述べている[10]。その際に生じる名辞の意味を判断の意味の一つの「変様 Modifikation」（ibid.）と呼ぶ。ここで問題になっている「由来」や「変様」は、一定の判断を基にして新たな名辞が構成されるという事態を指しているものとして読める。

注意しなければならないのは、以上の記述では、付加語的名辞の意味志向がそれに時間的に先立つ判断作用を必要とすると述べられているように見えるかもしれないが、そうではないということである。まず、もしそうだとすればそれは受け入れがたい主張だということを確認しよう[11]。例えば「日本で一番背の高い人」という名辞を我々は普通に理解することができるが、だからといってこれまで我々がみな「この人は日本で一番背が高い」という認識を誰かに対してなしたとは到底思えない。名辞を構成するために必要とされているのは構文論的な知識なのであって、それを基礎的なものから順次実際に構成したということではない[12]。このことは数名辞でも同様に注意されるべきことである。例えば$(1192^{11})^{92}$というような名辞を我々は理解でき、しかもその構成にしたがって（原理的には）分解できるが、これは我々が今まで経験的にこの構成を初めからやってみたことがあるということをなんら意味しない。このことは第一版の時点でも注意されていることだが、ミスリーディングな記述であることは変わりない。この記述上の問題点に二版の時点で思い至ったフッサールは、「由来」という語をミスリーディングなものと看做し、第二版では代わりに「遡示

zurückweisen」という表現を多用するようになる。さらに次のような追記をしている。

> ただしここで注意すべきは、「由来した」とか「変様」という言い方は決して経験心理学的および生物学的意味に理解されてはならず、体験の現象学的内実に基づく独特の本質関係を表現しているということである。」（XIX/1, 488B、強調は原文）

これはつまり、付加語的名辞の意味にとって、それ以前にそれに対応する判断作用を行っているなどといった事実的な出来事が問題になっているのではない、ということである。では「体験の現象学的内実に基づく独特の本質関係」とはいかなるものなのか。これは上の引用箇所の前後の部分を読み解くことで理解されうるが、ここにおいてまさに付加語的名辞が間接性を、それも我々が数名辞において確認した意味での間接性を持つことが指摘されるのである。

> しかしこのことは、「根源的な」判断が「変様された」作用のうちに何らかの形で「論理的に」「伏在している」ということを妨げない。〔…〕名辞的、付加語的表象自身の本質内実には、この表象の志向がそれに対応する判断を「遡示」していることや、その表象自身がこの判断の「変様」であることを示していることが、含まれているのである。我々が「p である S（das p seiende S）」（超越数π）という形式の表象の意味を「実現 realisieren」し、そしてその意味を完全に判明かつ本来的に遂行し vollziehen、かつまたそのような表現によって「思念されているもの」を充実化する証示の道 der Weg der Erfüllunden Ausweisung を選ぶとすれば、我々はいわば、それに対応する述定的判断 das entsprechende prädikative Urteil に訴えねばならず、その判断を遂行し、名辞的表象を「根源的に」そこから引き出し、成立させ、派生させねばならない。〔…〕したがって現象学的に見れば付加語的表象の本質には、由来とか派生とか、あるいはまた遡示などという言葉で表現されるある一定の間接性 Mittelbarkeit が伏在しているのである。（ibid.）

ここで言われているのは次のようなことである。まず冒頭の「論理的」という語をフッサールは真偽に関するものとして用いること、ならびに、直後の記述からもわかるように、ここで述べられていることは充実化にかかわるものである。具体的には、名辞作用が判断作用に対してその充実化に関してある関係を持っているということが述べられているのである。そしてそれは、付加語的名辞を充実化する際に、それに対応する述定的な判断をなさねばならない、という関係なのである。つまり、ここで述べられている「遡示」とは、述定的判断が付加語的名辞の意味において、その充実化のために遡らなければいけないものとして示されているということである。つまり、ある表現の充実化のためになされなければならない手続きが、その意味において示されており、それが判断作用である、ということである。さらに、ここでこの事象をフッサールが「間接性」と述べていることは、ここにおいてフッサールが前節末尾で指摘した間接性と同様の事態を見て取っていたということを示しているといえるだろう。

さらにフッサールは、数名辞の場合と同様に、この付加語的名辞はその遡示の系列をたどることで直接的な表象に帰着すると考えていた。

> 最後に我々が見出すのは単純な、単一光線的に客観化する諸分肢〔名辞のこと〕であるが、しかしこれらは必ずしも究極的な意味での原始的分肢 primitive Glieder ではない。なぜなら単一光線的分肢も名辞化された綜合でありうるからである[13]。〔…〕したがって多かれ少なかれ複雑な遡源性 Rückbezüglichkeiten が質料〔=意味〕の中に出現し、そしてそれとともに、独自の形で変様された間接的な意味で、いろいろな「内含的 impliziert」な分節と綜合形式がそこに出現することになる。諸分肢がもはや遡源的でなければ、それらはこの点でも単層的である。〔…〕あらゆる（端的でない）客観化作用の分析は、その作用に包含されている名辞化の中で遡示のステップを追跡する限り、最後には明らかに形式の面でも質料の面でも単層的な、「端的な schlicht」作用分肢へ帰着するのである。（XIX/1, 502f. B）

例えば言表文であれば、それは主語と述語へと分節化される。しかしその際、例えば主語の位置にある名辞が付加語的な名辞である場合には、その名辞の意

味において更なる分節化が遡示される。そして、その遡示を遡ってゆくことで、いつかは「原子的分肢」、「端的な」、直接的表象による意味志向に到達する、とフッサールは述べているのである。

ここにおいて、前節末尾で確認された三つの点、すなわち、名辞の持つ対象への間接性が、その名辞が段階的な構成を持つことによって生じるということ、その構成の歴史は意味に織り込まれているということ、そしてそのような間接性を持った名辞の充実化とは、その意味に立ち返りその構成へと遡ることによって直接的表象へと到り対象を直観する過程を含む、ということが確認されたこととなる。ここから、この付加語的名辞において、彼が数名辞における間接的表象と類比的な事象を見て取っていたと結論していいだろう。

さて、では「原子的分肢」、つまり直接的表象にあたるものはなんだろうか。フッサールはこれを、直示詞（を含む指標詞）と、固有名だと考えていた。

> それゆえ本質的に偶因的な表現〔=直示詞を含む指標詞〕は、固有名と、それが固有名本来の意味で機能している限りではあるが、同類のものであると思われる。なぜなら固有名も対象を「直接」命名するからである。(XIX/2, 555)

ただしこの引用からもわかるとおり、フッサールは固有名がその本来の役割を果たすのは直示の場面であると考えており、対象を発話者が直接同定しているのではない場合における使用は「派生的な意味機能 abgeleitete Bedeutungsfunktion」におけるものであると考えていた[14]。したがって、彼がここにおいて直接的表象に類比的なものとして考えていたのは主に直示詞であるといえよう。

このフッサールの判断が適切なものであることを確認するために、付加語的名辞において我々が対象を充実化する際の実践を少し参照してみよう。例として「この部屋で一番背の高い人は男性である」を考えよう。この言明を充実化するためには、まずは「この部屋で一番背の高い人」の指示対象を決定しなければならない。しかし、我々はこの名辞の意味はわかるが、その指示対象が誰かは知らないとしよう。そのとき我々は「x はこの部屋で一番背が高い」という述語が当てはまる人を一定の手続きの下で特定することになるだろう。そし

てその際、我々は同時に「この人はこの部屋で一番背が高い」と判断しているだろう。このように、付加語的名辞の対象を決定するには、我々は一定の範囲の諸対象に対してその条件が当てはまるかどうかを各々判断できなければならない。付加語的名辞は述定的判断を遡示するといわれるのは、このような、一定の条件を満たすかどうかを判断することによって対象を探す場面も含まれていると考えるのが妥当である。さて、この際、最終的に対象を特定しているというような状況にあるのは、その対象を「これ」（この人）といった直示詞で適切に指示し、かつそれを知覚している場合であるといえる[15]。したがって、フッサールの主張は我々が経験的言明を充実化する際に行っている実践を反映しているといえるだろう。

さて、以上において、フッサールが数学的言明における充実化を考察する中で見て取った名辞に関する論点を、彼は経験的言明に現れる名辞についても同様に見て取っていたということがいえるように思われる。しかしながら、フッサールが第五研究の、主に第四章と第五章で見て取った間接性と、第六研究第一篇第三章で見て取った間接性は、本当に同種のものなのだろうか。第一節の末尾で指摘した意味での間接性という観点から見れば、これは確かにそうである。しかし厳密に見れば、この二つの間は数学的言明と経験的言明という対象領域の相違にとどまらない差異が存在することもまた確かなのである。次節ではこのことを確認し、それでもなお現在の論点に関しては、二つの洞察の共通点は十分な形で確保できるということを示したい。

III 両分析の相違点と共通点

この二つの種類の名辞が異なる働きをしているということは、一方では意味にしたがって充実化のために遡示（要請）されるものが名辞から名辞への移行であるのに対し、もう一方では判断を為すことであることからも伺える。このことが示すのは名辞の構成の仕方に二種類のものがあるということであるが、しかしこれは数学的言明と経験的言明の差異を示すものというわけではないということは注意するべきである。以下では、この点に関して彼の議論を補っておきたい。

まず数名辞の簡約に相当する手続きは、経験的言明においても容易に見出すことができる。何らかの定義によって新しい表現を導入する場合がそれである。ここには例えばきちんと定義された省略表現なども含まれるだろう。したがって経験的言明においてもこのような表現に、数名辞において認められた間接性を見出すことができるだろう。そして確かに、定義によって導入された表現を含む言明を確証するために、その定義に遡るということは自然なことである。次に、付加語的名辞における判断の遡示に対応するものを数学的言明において考えてみよう。先ほど付加語的名辞の対象を決定する実践を参照した際、我々は名辞から対象が満たすべき一定の条件を展開することで対象を指示していた。そして数学的言明においても、このような形で数を一意に特定する条件を用いて対象を指示することがあるだろう。フッサールは、彼が「逆数演算 die inversen Operationen」（XIX/1, 337）と呼ぶ、減法や除法をこのようなものの典型として考えていた。これは『論研』においては加法や乗法などの「直接的演算」（ibid.）と並んで現れるだけであるが、『算術の哲学』においては条件によって定義される数として扱われている[16]。例えば「5－3」は、$3+x=5$ という条件を満たす x の値を指すものとして考えられている。この場合も、我々はこれらの記号の意味を理解できる限り、ある一定の手続きに従って「2」を見つけ出すことができる。そしてこの際に行っていることは、すでに指摘した意味での簡約ではなく、付加語的名辞の場合と類比的であろう。ここでは我々はこの条件を満たす対象へと接近するために、単にその記号を定義に従って書き換えるといったことをするのではなく、直接的表象を用いて数を順に調べていくという作業を行うのである。したがってこれについては、付加語的名辞においてフッサールが見出したのと同種の間接性を認めることができるであろう。さらに、これらは組み合わせることで一個の名辞を形成することができる。このことは、逆数演算であれば、例えば「((5－2)－1)－1」によって表現されるものなどを考えてみると良い。しかも、「((5－2)+3)－1」において表現されるような、直接的演算と逆数演算を組み合わせたものも可能である。どちらにおいても、各々の逆数演算の値を見つけることはこの名辞全体をより直接的にしている。したがって、この点において、逆数演算ないし付加語的名辞においてなされる手続きも以下では簡約と呼ぶことにしたい。

さて、以上のように一定の補完を伴ったフッサールの枠組みは、（直接に名指す際の）固有名、確定記述、直示詞、そしてそれらが含まれる言明における我々の実践を、意味ないし充実化条件という観点から統一的に見通すことのできるものになっている。例えば、私がアルバイト先で（飲食店だとしよう）店長に「二冷の一番奥のパック、賞味期限切れてないか確認してきて」と言われたというような具体的な事例も、この枠組みの中で、間接性をより直接的にしていく手続きの実行として理解することができる[17]。彼の枠組みにおいては、言明一般において我々がその充実化を問題にする際の実践は、当の表現の意味に織り込まれた構成による間接性を、意味志向において把握したとおりに簡約しつつ対象へと接近していく過程として描き出されるのである。そしてこの例においても、二種類の簡約がどちらも同様に対象へと接近していく段階の一つとして機能している。その意味で、もし彼が上記の二種類の間接性を同一視していたとしても直ちに問題のあるものではないのである。

IV 充実化概念の二義性

さて、以上より意味志向と直観が同一の意味を例化するとはいかなる事態かが明確になっただろう。意味志向とはある表現の意味に織り込まれたその表現の構成の歴史を把握することでそれを遡り当の指示対象へと到る手続きを把握していることであり、直観とはある対象へといたる手続き（意味）を実際に実行することであった。したがって、意味志向と呼ばれる作用も直観と呼ばれる作用も、それがどのような手続きと関係しているものであるかという観点から統一的に分類されうることになる。そして、ある意味志向とある直観とが同一の意味を例化しているとは、その両者が同一の手続きと関係しているということとして把握することができる。これにより、意味志向が直観によって充実化されることがいかなることかが、そしてフッサールの認識概念とはいかなるものかが明確な把握を得ることになった。

しかし、以上のような解釈に対しては、次のような批判が考えられる。確かに、以上の論述によって意味を仲立ちとした意味志向と直観の合致ということは一定の明確な把握の下にもたらされたかもしれない。さて、以上の論述はあ

くまで非本来的な充実化を経て本来的な充実化へと到るプロセスに焦点を当てたものである。したがって、その最終段階としての直接的表象における意味志向の充実化は、対応する直観（外的知覚や数の直観）によってなされると述べられるにとどまる。しかし、フッサールの充実化に関する分析は、むしろそのような知覚作用内部の構造に焦点を当てたものではなかったのか。例えば周知の「射映」の教説は、色や立体的形状を伴う対象がいかに知覚され、そしていかにその充実の度合いを増大させていくかという場面を記述したものではなかったのか。本来の充実化の分析とはこの側面に関する分析を指すものなのではないのか。

本稿においてこの疑問に対して十分に応答することは紙幅の関係上出来ないが、次の二点を指摘することで、その大まかな見通しを示唆することとしたい。まず、『論研』における充実化概念は二義的であるということ。この点に関しては、テクストの読解から明らかにすることも出来るが、さしあたりこのことが1908年の『意議論講義』におけるフッサールの自己批判において明確に指摘されていることに触れるにとどめたい。

> しかしながら、すでに第五そして特に第六研究において多く読み取られるべきであったのだが、充実化統一を、満たされるという現象を、充実化意識におけるあれこれの作用の間で自らを打ち立てる認識統一として表示したことは、軽率であった。というのも、そこで徐々に明るみに出されてきたことは、最初から鋭く区別しなければならないものだからである。すなわち、1）直観化としての、いわば空虚な表象を直観的充実化によって充填することとしての充実――そこではしかし現実に充実する直観化から擬似直観化が区別されるべきであるが。他方で、2）あるドクサ、ある信念、ある核心、ある推測等々という意味におけるある思念の確証 Bestätigung、確認 Bekräftigung、さらに詳しく見れば、場合によれば明証的にする（適合する！）「直観」を通した保持 Bewährung という意味における充実〔…〕。（XXVI, 16f.）

このフッサールの自己批判は、『論研』におけるフッサールの充実概念が、信念

の正当化と感覚内容の充填の間の二義性を含みこんでいたということを示唆している[18]。もちろん、彼の学問論的関心に導かれた認識概念は、第一義的には信念の確証として理解されるべきである。もう一点は、以上の批判において指摘された充実化概念が感覚内容の充填に対応するものであり、本稿の充実化概念が信念の正当化に対応するものであろうということである。

注意しておかねばならないのは、以上の指摘は決して感覚内容の充填に関する分析（この表現もミスリーディングなものではある）が認識分析にとって不要であるといったことを全く示唆しないということである。むしろそのような分析は上の充実化のプロセスが行われるための前提として機能するような志向性の働きに関する、より根本的な段階におけるものである。このことを本稿のタームで言い直せば、直接的表象における本来的充実を可能にする知覚作用が成立するための主観的条件の解明である。ただここで注意すべきは、そのような感覚内容の充填は意味志向と直観の合致として語られることが適切ではないような類のものであるということであり、このことこそまさにフッサールの自己反省において指摘されていたことでもある。結局のところ、この二義性が明確に自覚されてこなかったことが、『論研』におけるフッサールの意味志向の充実化という概念が曖昧な形でのみ解釈されてきたことの原因の一つであるように思われる。

結び

さて、以上では、冒頭で示唆されたような意味を充実化条件、より具体的には手段・手続きとして捉える見解が、フッサールの見解として解釈されうるだけでなく、フッサールの論述が、そのような意味概念を具体的な場面に対して十分適用できるまでに明確な形で提示しているということが示された。そしてその下で、意味志向と直観が同一の意味を例化しているということがいかなる事態なのかの判明な把握が得られ、結果として意味志向の充実化としてのフッサールの認識概念が明確化されたといっていいだろう。

しかし、以上の点に加えて、フッサールが『論研』において認識概念に関して行った分析は、以上のような充実化の構造の分析と混同されつつではあるが、

そのような充実化(とりわけ事物を外的知覚により直観することによる充実化)の主観的な条件を明らかにするというより根本的な段階へも踏み込んでいたことが示唆された。この段階に関するフッサールのより詳細な分析は、初期においては主に『事物と空間』(1907)[19]において展開されており、これは『イデーン II』[20]における中期以降の彼の諸分析へと繋がるものとなっている。本稿で明らかになった意味での充実化概念との関連を見据えた上でのこれら諸分析の更なる検討が、今後の課題となるだろう。

注

1 第一研究第 9 節参照。

2 「表現は対象を、表現の意味を媒介にして表示する(命名する)〔…〕意味作用とは、そのつどの対象を思念する一定の仕方である」(XIX/1, 54)。

3 このような解釈はすでに、[富山 2009] において提示されている。本発表もこの提案に沿うものであり、また本発表の以下の論述はこの解釈の正当性を擁護するものであると考えている。また、この「充実化のための手続き」を「充実化条件」と言い換えれば、三上に倣って「文の意味を知るとは、文の充実化条件を知ることである」と定式化しうるような主張をフッサールに帰すこともできるかもしれない。[三上 1998, p. 81]。

4 注意すべきなのは、この「把握」は「習得」とは明確に区別される必要がある概念だということである。把握ということで念頭に置かれているのは、当の表現の指示対象を見つけ出すためのすでに習得されている手段を特定することであって、それを新たに身につけることではない。

5 これは初めの 1 に後続者関数 (+1) を繰り返し適用した形に相当し、それゆえ「+」は加法演算を示す記号ではない。また直接形とは、一般にはカノニカルな形(canonical form) 等と呼ばれるものに対応する。以下の説明からも明らかなように、フッサールにとって算術的演算は複合的な表現を直接形における対応する数名辞(直接的表象)へと簡約する手続き、ないし直接的表象から始めて複合的な表現を構成する手続きであった。このような考え方は初期の『算術の哲学』においてすでにフッサールの基本的な立場であり、これについては『論研』時においても本質的な変化はなかったように思われる。[Centrone 2010, pp. 40, 45f., 172; etc.]、[坂間 2006] 参照。

6 フッサールは「表象」という語を比較的ルーズに使うが、本発表に現れる限りでは、有意味な言語記号(彼の言い方では「表現」)だと考えてよい。

7 「間接的な志向はみな間接的な充実化を、それももちろん有限回のステップの後に、最終的にはある直接的な直観において終了するような間接的な充実化を、要求するという命題が妥当する」(XIX/2, 602)。

8 (XIX/2, 605)。

9 例えば「5^3」という間接的表象の意味は「5・5・5 という組成」とされる。

10 (XIX/2, 333) の例。

11 第二版では上記引用箇所の「由来した」には引用符がつけられている。

12 このことは第四研究、第十一節から十四節に詳しく述べられている

[13] 名辞化とは文を dass 節として名辞の働きを可能にする操作のことを主にさすが、ここでは付加語的名辞の形成も含めて考えているとみてよい。本稿で触れることができた付加語的名辞の形成だけでなく名辞化一般に関する研究は、今後の課題としたい。

[14] (XIX/2, 555f.) 参照。

[15] 実際には探索すべき一定の範囲の諸対象を順次直示していく必要がある。この点については第三節を参照。

[16] (XII, 281f.)。

[17] この命令は「二冷の一番奥のパックの賞味期限が切れている」という文の真偽を確かめよというものとして理解できる。ここで、この文の主語にあたる「二冷の一番奥のパック」という名辞を考えてみよう。私が意味に従って行う手続きは次のようなものだろう。まず「二冷」とは「二階の冷蔵庫」の略であることを私は先輩から聞いて、これが「二階の冷蔵庫の一番奥のパック」という表現であると理解する。そして私は「二階」に上がる。その際、「ここは二階である」という判断を下し、元の表現を「ここの冷蔵庫の一番奥のパック」という表現へと簡約することができる。次に私はその階の中で「冷蔵庫」を探し、見つける。この際「これは冷蔵庫である」という判断を下しており、結果「これの一番奥のパック」という表現へと簡約が行われたことになる。さらに、それを開けその中の「一番奥」を見る。結果「ここのパック」へと簡約される。そして「パック」は「牛乳パック」の略であると私は知っているので、さらに「ここの牛乳パック」へと簡約される。そしてそこにある「牛乳パック」を見つけるとき、最終的には「これ」へと簡約された。そしてこのとき、私は「二冷の一番奥のパック」という対象の充実化ができたことになる。後はその賞味期限を見て、今日の日付と照らすことで元々の言明の判断ができる。

[18] この点に関する指摘、ならびに『論研』から『意義論講義』そして『イデーン I』にかけてのその発展史的な意義に関しては [福島 2008] 参照。

[19] (XVI)。

[20] (IV)。

凡例

- フッサールの全集版からの引用に関しては、引用部分の末尾にローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数を記している。また、『論研』からの引用に関しては特に断りがない限り初版を用いる。第二版を用いる場合は、ページ数の末尾に「B」を付けて示すこととする。
- 引用部分における原文の強調は基本的にすべて省略されている。強調を付した場合は末尾に著者によるものか引用者によるものかを記す。
- 引用文中の「[]」は引用者による補足を示す。また、中途省略した場合は〔…〕と表記する。

参考文献

[Bernet et al. 1996] Rudolf Bernet, Iso Kern, & Eduard Marbach, Edmund Husserl. Darstel-lung seines Denkens, Felix Meiner, 1996.

[Centrone 2010] Stefania Centrone, Logic and Philosophy of Mathematics in the Early Husserl, Springer, 2010.

[Zahavi 2003] Dan Zahavi, Husserl's Phenomenology, Stanford University Press, 2003.
[坂間 2006] 坂間毅「フッサール「計算の哲学」の構想について」,『論集』, 第 25 号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2006, 299-308.
[富山 2009] 富山豊「フッサール初期志向性理論における「志向的対象」の位置」,『フッサール研究』, 第 7 号, フッサール研究会, 2009, 61-72.
[三上 1998] 三上真司「フッサールと実在論の問題(III)」,『横浜市立大学論叢人文科学系列』, 第 49 巻第 1 号, 横浜市立大学学術研究会, 1998, 71－116.
[福島 2008] 福島祐介「フッサールにおける志向の充実化について」,『哲学論叢』, 京都大学哲学論叢刊行会, 第 35 号, 2008, 46-57.

（くずや　じゅん／東京大学）